

体育理論領域における課題の検討

山元秀太^{*1}・坂本一真^{*1}・蓑田修治^{*2}・山田禎郎^{*3}・則元志郎

Examination of Problems in the Theory of Physical Education

Shuta YAMAMOTO ^{*1}, Kazuma SAKAMOTO ^{*1}, Shuji MINODA ^{*2},
Yoshiro YAMADA ^{*3}, Shiro NORIMOTO

(Received October 1, 2015)

I. 緒 言

2009年に高等学校学習指導要領が改訂され、体育では、「体育理論」の指導内容の整理、精選が図られ、授業時間数が明示された。しかし、学習指導要領に常に必修として位置付けられてきたにもかかわらず、高校までの教室でする「体育理論」の授業実践を井筒・鈴木¹⁾は「雨天時に行うことを常としていたり、実際に授業として行われない学校もみられるようである。こうした背景には、保健体育教員が実技の授業を重視しすぎていること、体育理論に対する生徒の興味・関心の低さなども考えられよう」と述べている。また近藤は、「体育理論」と関連して、幾つかの論稿がみられるが、具体的な授業像はいまだに見えてこない。こうした理論を位置付けていく方向性に対して、当の中学校の教師達にとってみれば「忙しい中で、そんな難しいことを要求されても困る」「生徒の体力が劣っている現状で、実技を減らしてまで理論を配置するのはどうか」「実技よりもおもしろくない理論をする必然性が見えない。生徒にも人気がないのでは」²⁾といった思いを抱いていることは容易に想像がつくと述べている。

また野間³⁾は、高等学校における体育理論領域の内容についての研究において、現代スポーツの課題に対し倫理的・研究の視点に立った学習、高校期における学校内外のスポーツ機会や施設の活用についての学習、我が国のスポーツ基本法や諸外国のスポーツに関する施策の学習の必要性を示したうえで、スポーツ文化固有の内容と生涯スポーツ設計に関わる内容、運動に関する領域で必要な知識を体系的に捉えて、運動・スポーツの実践に必要な個別の「知識」についても取り扱うことを提案している。

2009年改訂高等学校学習指導要領解説総則編に「学校において特に必要がある場合には、学習指導要領に示していない内容を加えて指導することもできる」といった記述があるように、学習指導要領が体育理論について教えるべき内容の最低基準であるという性質を有しているならば、よりよい「体育理論」の授業実践に向けて野間が提案した新たな体育理論内容を含めた、学習指導要領に記載がされていない体育・スポーツに関する内容（以下「総合文化的内容」と記す。）を高等学校における体育理論の授業において取り扱っている可能性もあることも検討する必要があるであろう。また現段階の体育理論における授業実践の成果を把握し、体育理論領域における課題を検討することは、体育理論学習の充実を目指すうえで有意義であると考えられる。

以上より、総合文化的内容を含めた高等学校までの体育理論の内容についての理解の程度、学習意欲を調査することで、体育理論領域における授業実践的な課題および内容的課題を検討することを目的とする。

II. 研究方法

1. 調査対象

A 高等学校の3年生 131名、B 高等学校の3年生 291名、C 大学の2015年4月1日現在18歳の学生 147名の計 569名を対象に質問紙調査を行った。18歳の大学生を対象としたのは、高等学校の体育理論の授業を受け

^{*1} 熊本大学大学院教育学研究科 ^{*2} 熊本国府高校 ^{*3} 熊本必由館高校

てから間もない様々な高等学校出身者の資料を得るためである。また高等学校3年において、学習する体育理論の内容「豊かなスポーツライフの設計の仕方」については、学習の途中段階であることも踏まえて、高等学校2年生までの体育理論の内容「スポーツの歴史、文化的特性や現代スポーツの特徴」、「運動やスポーツの効果的な学習の仕方」の内容の学習成果から主に体育理論領域における課題を検討することとした。

2. 調査方法および調査期間

調査は、2015年7月下旬から8月下旬にかけて、質問紙調査を実施した。

3. 調査内容

本研究では、高等学校までの体育理論領域内容8項目と、総合文化的内容の7項目の計15項目について理解の程度、学習の意欲を調査した。

総合文化的内容における項目は、野間が示した「体育理論」の授業実践に向けた新たな内容とC大学授業「総合文化としてのスポーツ」のオーガナイザーである則元が設定した授業内容を参考に、2009年改訂の高等学校学習指導要領保健体育編の体育理論領域の必須項目と照らし合わせて項目を設定した。またその項目を表1に示す。

表1. 体育理論領域における内容の分類

学習指導要領内容	指導要領記載	内容
スポーツの歴史、文化的特性や現代スポーツの特徴	有	1) フェアプレイ 2) 日本発祥 3) 経済効果
	無	9) 伝播・受容 15) スポーツと政治・外交
運動やスポーツの効果的な学習の仕方	有	4) 技能練習 5) 安全確保 6) 心身影響
	無	10) 心理状態 11) 内部機能 12) 危機管理
豊かなスポーツライフの設計の仕方	有	7) スポーツライフ 8) スポーツ振興
	無	13) スポーツと住民自治 14) スポーツ基本法

4. 分析

統計分析は、統計解析ソフトRを用いて行った。なお有意水準は、5%未満とした。

5. 得点化

理解の程度では、「かなり知っている」を4点、「だいたい知っている」を3点、「あまり知らない」を2点、「まったく知らない」を1点、また、学習の意欲については、「かなり学習したい」を4点、「やや学習したい」を3点、「あまり学習したくない」を2点、「まったく学習したくない」を1点というように得点化した。また各項目の平均点を算出し、基準を3点に設定して、理解の程度・学習意欲における得点の高低を調査した。

Ⅲ. 結 果

1. 体育理論領域における項目

体育理論領域における8項目の「理解の程度」と「学習意欲」について、回答の得点を平均し、図1に示した。各項目の「理解の程度」と「学習意欲」の得点と基準点との間に差があるかの検定を行った結果、「理解の程度」については、すべての項目において基準点よりも有意に低かった。

したがって、体育理論領域における内容全般の「理解の程度」は低いことが示された。また、「学習意欲」については、4) 得意とするスポーツの技能を高める練習法（以下「4) 技能練習」と記す。）のみが基準点との間に有意な差が認められず、その他の6項目は、基準点よりも有意に低かった。よって、4) 技能練習の「学習意欲」が高く、その他の6項目の「学習意欲」が低いことが示された。したがって、学習者は、体育理論領域の内容を理解できたという実感を持っていないこと、4) 技能練習を除く、体育理論領域の内容の学習について意欲的でないことがわかる。

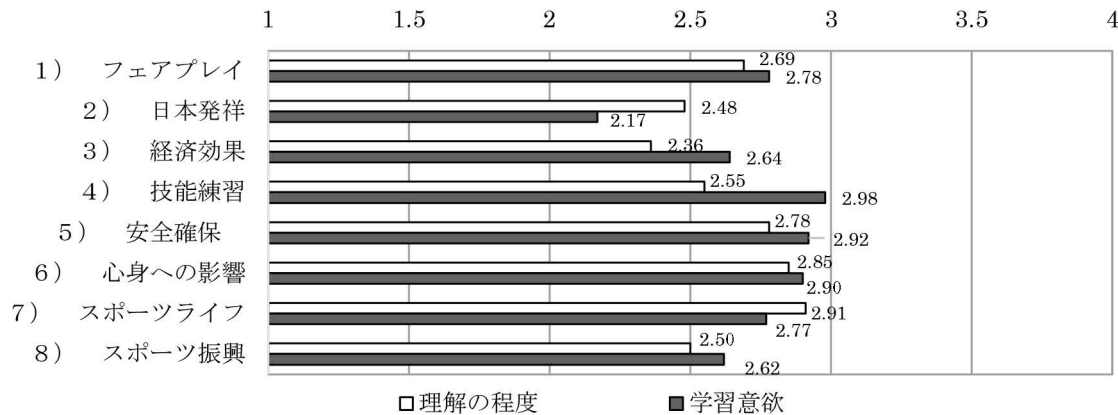


図1. 体育理論領域の「理解の程度」と「学習意欲」(点)

2. 体育理論領域の学習指導要領における内容ごとの「理解の程度」と「学習意欲」

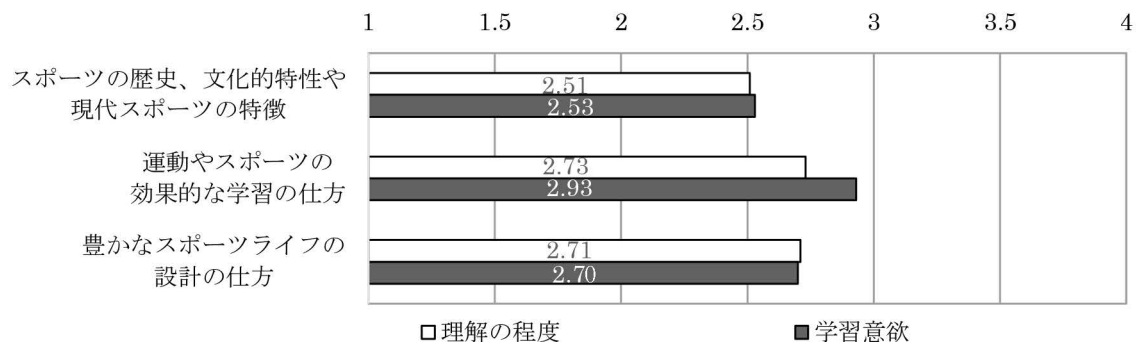


図2. 体育理論領域の学習指導要領内容ごとにみた「理解の程度」と「学習意欲」(点)

2009年改訂の高等学校学習指導要領保健体育編の体育理論領域における内容である「スポーツの歴史、文化的特性や現代スポーツの特徴」、「運動やスポーツの効果的な学習の仕方」、「豊かなスポーツライフの設計の仕方」について、「理解の程度」と「学習意欲」の回答の得点を平均し、図2に示した。

各内容の「理解の程度」と「学習意欲」の得点と基準点との間に差があるかの検定を行った結果、「理解の程度」が高い内容はなく、3つの内容との間に有意な差は認められなかった。しかし、「学習意欲」については、「運動やスポーツの効果的な学習の仕方」が高く、他の2つの内容との間にも有意な差が認められた。

したがって、体育理論領域の内容別にみても、学習が充実してなされている内容はなく、「運動やスポーツの効果的な学習の仕方」については、「学習意欲」が高いにも関わらず、「理解の程度」が低いことから、学習者の学習意欲を喚起させた授業は行われていないことと同時に、学習者の「学習意欲」に則した授業を行えたなら、学習の充実が期待できる内容であることが示唆される。

3. 総合文化的内容における項目の「理解の程度」と「学習意欲」

総合文化的内容における7項目の「理解の程度」と「学習意欲」について、回答の得点を平均し、図3に示した。各項目の「理解の程度」と「学習意欲」の得点と基準点との間に差があるかの検定を行った結果、「理解の程度」、「学習意欲」共に、すべての項目において基準点よりも有意に低かった。つまり、総合文化的内容は、高校までの体育理論の授業においては、扱われていない、もしくは、扱われていたとしても、理解できたという実感を持っていないこと、学習について意欲的でないことがわかる。

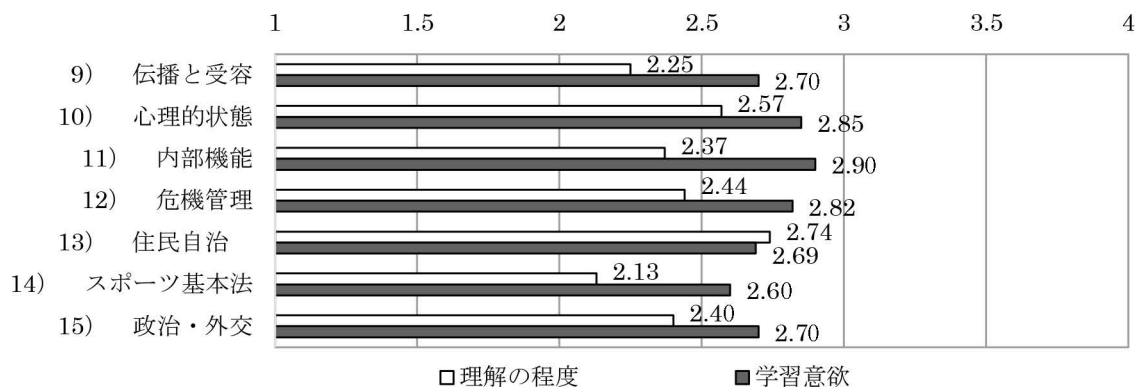


図3. 総合文化的内容の「理解の程度」と「学習意欲」(点)

4. 学習指導要領における内容ごとにみた総合文化的内容の「理解の程度」と「学習意欲」

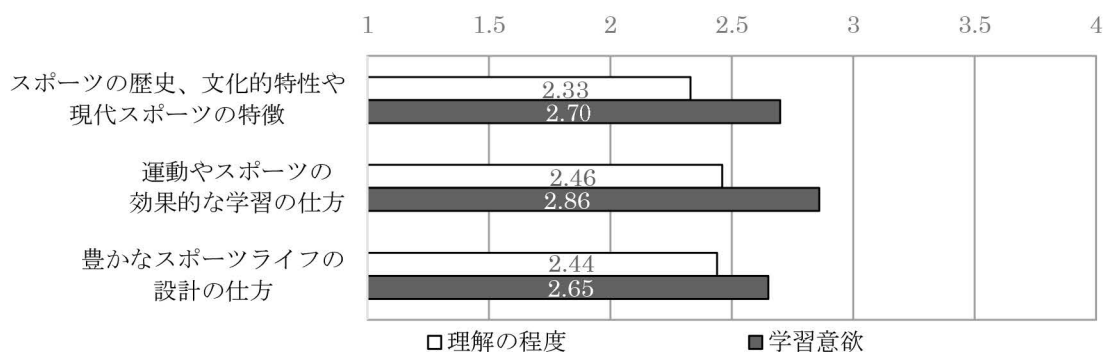


図4. 学習指導要領内容ごとにみた総合文化的内容の「理解の程度」と「学習意欲」(点)

2009年改訂の高等学校学習指導要領保健体育編の体育理論領域における内容である「スポーツの歴史、文化的特性や現代スポーツの特徴」、「運動やスポーツの効果的な学習の仕方」、「豊かなスポーツライフの設計の仕方」における総合文化的内容の「理解の程度」と「学習意欲」の回答の得点を平均し、図4に示した。

各内容の「理解の程度」と「学習意欲」の得点と基準点との間に差があるかの検定を行った結果、「理解の程度」、どの内容も基準点より有意に低く、3つの内容との間に有意な差は認められなかった。しかし、「学習意欲」については、どの内容も基準点より有意に低く「運動やスポーツの効果的な学習の仕方」については、他の2つの内容に比べ有意に高かった。

したがって、総合文化的内容においても、「運動やスポーツの効果的な学習の仕方」の内容が他の2つの内容に比べ興味・関心が高いことがわかる。

5. 体育理論領域と総合文化的内容における「理解の程度」と「学習意欲」

体育理論領域と総合文化的内容における「理解の程度」と「学習意欲」の回答の得点を平均し、図5に示した。「理解の程度」と「学習意欲」の得点と基準点との間に差があるかの検定を行った結果、「理解の程度」、「学習意欲」共に、基準点より有意に低かった。また、「理解の程度」について、総合文化的内容に比べて、体育理論領域は有意に高かった。「学習意欲」については、体育理論領域と総合文化的内容との間に有意な差はみられなかった。したがって、体育理論領域は、総合文化的内容に比べると、より学習はできているが、基準点からみると、「理解の程度」は低く、「学習意欲」に関しては、あまり学ばれていない総合文化的内容の「学習意欲」の得点の方が高いことがわかった。

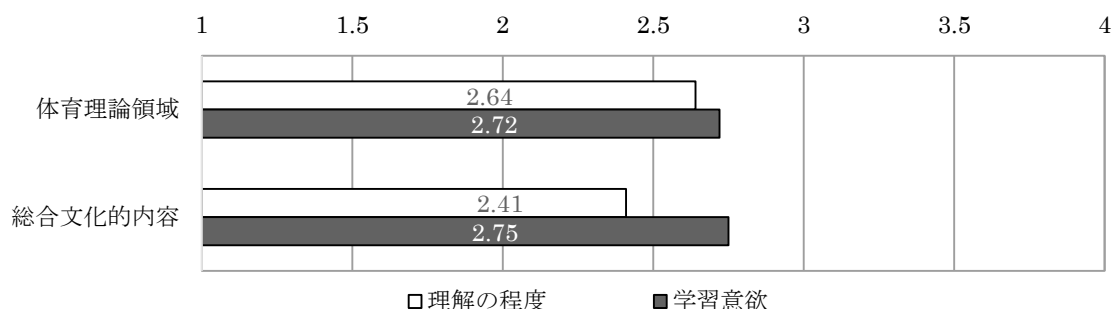


図 5. 内容別に見た「理解の程度」と「学習意欲」(点)

IV. 考 察

1. 体育理論領域の学習実態からみた課題

本研究において、2009 年改訂学習指導要領に示された体育理論における内容全般にわたり、体育理論領域の内容を学習者が理解しているとはいえない結果となった。

井筒・鈴木は、1988 年改訂学習指導要領に示された体育理論の内容について、理解しているとされる生徒は約半数、もしくはそれ以下にとどまり、体育理論に関する生徒の理解は、必ずしも高いとは判断しがたい⁴⁾と述べている。また則元らは、1998 改訂学習指導要領に示された体育理論の内容について、「高校までに体育の授業で学んだ」および「説明可能」という実感を得ていなかった者が、全体の約 8 割におよんだ⁵⁾としている。

両研究を踏まえると、本研究より、過去 3 度の学習指導要領改訂を経て、「体育理論」の指導内容の整理、精選が図られ、授業時間数が明示されたにもかかわらず、その学習実態は、望ましいものではなかったことが示唆された。

学習意欲についても、本研究では、「運動やスポーツの効果的な学習の仕方」を除いて、体育理論領域の内容の学習意欲が高いとはいえない結果となった。「運動やスポーツの効果的な学習の仕方」は、言い換えれば、自然科学的内容であり、出原は、1998 年改訂学習指導要領における体育理論では、「自然科学的内容」だけが求められており、文化的、社会科学的内容が欠如している⁶⁾ことを指摘している。これを踏まえると、本研究において、「運動やスポーツの効果的な学習の仕方」の学習意欲が「スポーツの歴史、文化的特性や現代スポーツの特徴」と「豊かなスポーツライフの設計の仕方」に比べ高かったことから、現行学習指導要領以前の体育理論で、「自然科学的内容」が重視されていたことが授業実践に少なからず影響していることが推察される。

則元らは、1998 改訂学習指導要領における体育理論の取扱いについて、運動技能の内容と相互に関連を図りながら学習を進めることを留意していることから、高校までの体育授業は運動の実践(実技)を通じて体育理論の内容を理解できるようにするとともに、運動技能を高めることを目標にしているとし、運動実践を通じた授業は、学習者が体育理論の内容を理解しがたい環境であった⁷⁾と指摘している。

しかし、2009 年改訂学習指導要領に示された体育理論領域では、教室などで、まとまりで学習することが効果的な内容を「体育理論」に、それぞれの運動領域で学ぶことが効果的な内容は運動領域へと整理され、体育理論領域における内容においては、教室などで、学ぶことを主としているように体育理論の授業形態が見直され、整えられたにも関わらず、本研究においては、体育理論領域における内容である「スポーツの歴史、文化的特性や現代スポーツの特徴」、「運動やスポーツの効果的な学習の仕方」、「豊かなスポーツライフの設計の仕方」の内容の理解の程度、学習意欲は低く、体育理論における授業実践の成果は、望ましいものではなかったことが示された。

井筒・鈴木⁸⁾は、体育理論領域の理解の低さについて、学習時間の不足、指導(授業展開の)方法の工夫不足、体育理論に対する生徒の興味・関心の低さ、体育理論に対する学習意欲のなさを指摘している。この見解をもってすれば、体育理論領域に関する意欲を高め、理解を深めさせるような授業を行っていく必要があり、体育理論における専門性といったような授業者側への課題が示唆される。

2. 総合文化的内容の学習実態と体育理論領域の内容からみた課題

総合文化的内容における7項目の理解の程度と学習意欲については共に低かった。体育理論領域の内容についても同様のことがいえることから、高等学校までの体育理論の授業において、学習指導要領が示す体育理論領域の内容から派生、広げた学習、授業は行えていないことが示唆された。

佐藤・友添⁹⁾は、スポーツについて強く、そして深く考え、スポーツという文化を新たに創造してくために、今、体育には、「理論」の学習が求められており、体育理論の授業の充実がこれからの社会における体育の存在意義を決めると述べている。また体育は「運動文化の継承・発展に関する科学を教える」ものとする中村¹⁰⁾の見解をもってするならば、体育科教育の目指すところにおいて、体育理論の授業の充実が非常に重要な課題であることがわかる。

また野間¹¹⁾は、これまでの「体育理論」の価値や存在意義を十分に示すことができなかったことが問題であるとし、その要因として、体育の目標の変化に応じて「体育理論」の内容が大きく変化してしまったこと、研究者がそれぞれの立場によって、多方面から必要性が示されてはいたが、「体育理論」として何を学ばせるのかという視点での研究が十分にされてこなかった現状がある¹¹⁾としている。このように未だに体育理論の内容的課題が示されているなか、本研究において体育理論領域の内容よりも総合文化的内容の「学習意欲」が高かったことに鑑みても、体育理論で何を教えなければならないのかを再認識し、体育理論領域の内容を再構成する余地があることが示唆された。

V. 結 論

本研究において、以下の体育理論領域における課題が示唆された。

1. 体育理論領域に関する意欲を高め、理解を深めさせるような授業を行っていく必要があり、体育理論における専門性が必要であること。
2. 体育理論で何を教えなければならないのかといった内容的課題を再認識し、体育理論領域の内容を再構成する余地があること。

VI. 引用・参考文献

- 1) 井筒次郎・鈴木漠（1998）高等学校における「体育理論」の指導に関する一考察. 日本体育大学紀要, 27 巻, 2 号, p 294
- 2) 近藤智靖（2012）「体育理論」の授業をどう工夫するか－「運動やスポーツの学び方」を授業として展開するには－. 学研・教科の研究保健体育ジャーナル, 92 号, p 1
- 3) 野間基子（2011）高等学校における「体育理論」の内容に関する批判的検討. 日本体育学会大会予稿集, 62 巻, p 265
- 4) 同掲書 1) p 294
- 5) 則元志郎・西田明史・水月晃・柿原一貴・笠井妙美・田中靖久（2009）大学体育における知識・能力の形成（1）：大学入学時における保健体育教科の知識・実践力の実態と大学体育の課題. 熊本大学教育学部紀要 人文科学, 58 巻, p 27
- 6) 出原泰明（1999）体育に必要な「知」とは何か. 体育科教育, 47 巻, 15 号, p 13-16
- 7) 同掲書 5) p 27
- 8) 同掲書 1) p 299
- 9) 佐藤豊・友添秀則（2011）楽しい体育理論の授業をつくろう. 大修館書店, p 2-3
- 10) 中村敏雄（1971）学校教育は、何を教える教科であるか—高校の体育指導を考える. 体育科教育, 19 巻, 8 号, p 53-56
- 11) 同掲書 3) p 265
- 12) 文部科学省（2008）高等学校学習指導要領解説 保健体育編 体育編. 東山書房
- 13) 小林昌幸・伊藤巨志（2007）保健体育理論に関する一考察. 新潟工科大学研究紀要, 12 号, p 111-117